

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第31号 1995, 9, 20

発行

北海道ポーランド文化協会

〒360 札幌市中央区南2東2

河合楽器製作所北海道支社内

電話 011-231-8661

FAX 011-221-4936

北海道ポーランド文化協会

第九回総会・懇親会

日時 十月十一日（水）六時三十分より

場所 すみれホテル（北一条西二丁目）

電話 二六一一五一一

総会

予定されている議事

- 一、前年度事業および決算報告
- 二、事務局長の交替
- 三、運営委員の交替
- 四、今年度事業計画および予算
- 五、その他

懇親会

- 一、ピアノ演奏 高岡 美保
- 二、独唱 多米 爽
- 三、ポーランドの近況報告
安藤 厚
- 四、会食

第九回の総会を上記の通り開催します。総会で決められることではありませんが、事務局長、および運営委員の一部の交替が予定されています。一九八七年十月二日に協会が設立されて以来、事務局長を勤めていただき、協会の発展に御尽力下さった、吉田宏事務局長をはじめとする方々への謝意を表す機会にしたいと存じます。多数の会員のご出席をお待ちしています。

懇親会参加費 会員三千五百円、当日徴収します。

準備の都合上、同封のハガキで九月末日必着にてご出欠をお知らせ下さい。内容もり沢山の楽しい会になると思います。ご家族、友人、知人のご同伴を歓迎します（非会員の参加費は四千元とします）。

ミツキエヴィチのバラードから

シヨパンのバラードへ

三浦 洋



ミツキエヴィチ

ポーランドでコンパクト版のミツキエヴィチ作品集を見つけたのを機に、詩人ミツキエヴィチ（一七九八～一八五五）のバラードと音楽家シヨパン（一八一〇～一八四九）のバラードとの関係について調べてみることにしました。芸術史の観点からして「文学ジャンルとしてのバラード（物語、譚詩）から音楽ジャンルとしてのバラードの成立へ」の経緯については興味が尽きません。まして、「器楽にバラードという名をつけたのはシヨパンが最初であった」（田村進『ポーランド音楽史』）ということを知れば、なおさらです。

周知の通り、シヨパンとミツキエヴィチは同時期にパリに暮らしている親交があり、ミツキエヴィチの二つの詩による歌曲をシヨパンは作っています（「消えろ！」と「いとしき人」）。また、シヨパンの四つのバラードは、ミツキエヴィチの四つの作品からインスピレーションを得て作られたものだ、という半ば伝説めいたエピソードが伝えられています。すなわち、シヨパンのバラード一番は、ミツキエヴィチの「コントラート・ヴァーレンロット」に、二番は「シフィテシ湖」に、三番は「シフィテシ湖の水の精」に、四番は「ブドリスの三兄弟」に対応する、という説です（これらのうち「コントラート・ヴァーレンロット」を除く三つの作品は、『バラードとロマンズ』という詩集に収められています）。ところが、この説には確固とした根拠がないようです。

筆者が手に取れる限りの資料を使って、この説の起源を辿っていくと、次のような事実がありました。△バラード一番と二番について▽シューマンはかねてシヨパンのバラード一番を「最高傑作」と激賞していました。△バラード二番が発表されたときに、「このバラードを書くためにミツキエヴィチのある詩からインスピレーションを受けたとシヨパンは言っていた」と記されています。しかし、ミツキエヴィチのどの作品であるのかについて特定の題名を挙げていません。

△バラード三番について▽ドイツの詩人ハイネによれば、シヨパンはハイネに対して、バラード三番の着想のもとが「水の精（仏語でオンディーヌ）」にあり、それはハイネの詩「ローレライ」にも通じる、と語ったそうです。その「水の精」がミツキエヴィチの「シフィテシ湖の水の精」とも結びつけて解されるようになったらしいのです。以上のように、バラード一番と二番はシューマンが、バラード三番はハイネが広めた内容がもとになって、ミツキエヴィチの作品との関連が想像されるようになったらしいのです。△バラード四番についてはそのようなエピソードすらありません。バラード四番が「ブドリスの三兄弟」に対応するというのは、後世の人々の全くの憶測でしょう。結局のところ、大まかな意味では、ミツキエヴィチの作品群からシヨパンのバラードへのゆるやかな影響関係があったことは推測できるものの、特定のどの作品が該当するのかについては、後の人々の憶測であるというのが真相なのではないでしょうか。

したがって、この俗説を肯定するのも、否定するのも、それぞれに幾らかの根拠があることになるでしょう。概して、肯定派はグルリエやブールニケルらフランスの研究者たちで、この説を好意的に紹介しています。背景には、ミツキエヴィチが一八四〇年から四年間コレージュ・ド・フランスの教授をつとめ、スラブ文学史を講義したことに対する尊敬の念があるのかもしれませんが（シヨパンとサンドはこの講義をよく聴きに行ったそうです）。ピアノリストのコレトも、シヨパンを語るとき、ミツキエヴィチに言及しています。これに対して、イギリスの著名なシヨパン研究者であるヘドリーは「こじつけのような結末」であると断言して真っ向から否定しています。確かに、否定派には「シヨパンは標題音楽を志向しなかった」という説得力のある根拠がありますが、一方で、否定してしまうと、シヨパンが自分の四つの作品をあえて「バラード」

ブドリスの三兄弟——リトアニアのバラード——

老ブドリスが、自身に似てかつぶくよきリトアニア人なる三人の息子を庭に呼び集めて申すには

「馬を引きたて、鞍しつらえよ

弓矢も劍（つるぎ）も研ぎすませよ！

「ヴィルニユスで我が聞きしは、必ずや布告されるといふ

世界の三方への三つの遠征

オルギェルトはロシア領を、スキルギェウは隣国ポーランドを、僧キェイストゥートは「ドイツの」チュートンを攻略するといふ

「いざ發て、たくましき者たち、赴いて国に仕えよ

そなたたちにリトアニアの神々の導きあれ！

今年、我は赴かぬが、しかれども赴く者たちに忠告を与えん

そなたたちには三通り、三つの道あり

「そなたたちの一人は、オルギェルトに従いロシアへ向かうべし
イルメン河を遡りノブゴロドの城下へ

かの地にはテンの尾（しっぽ）や白銀色（しろがね）の織布あり
かの地の商人（あきんど）が持てる大金は氷のごと

「二人目は僧キェイストゥートの隊に従え！

チュートンのならず者どもを根絶やしにせよ！

かの地には砂のごと琥珀あり、奇しき輝きのラシャあり

かの地の僧たちはまばゆき衣まとえり

と呼んだ理由が説明できず、この問題は宙に浮くことになりませう。

ともあれ、件のミツキェヴィチの作品が一つも日本語に訳されていないのは寂しい限りです。先頃、NHKのピアノ教育番組で先生をつとめたモスクワ音楽院教授のゴルノスタエヴァが、「ショパンを教えるとき、学生たちにミツキェヴィチをも理解するように指導している」という旨の発言をしていることを知ったとき、ショックを受けました。ミツキェヴィチの作品はロシア語訳されているので、モスクワ音楽院の学生たちはショパンのバラードを勉強するとき、同時にミツキェヴィチのバラードの世界に接することもできるので、日本ではそれがかなわないのです。さて、短い前置きのつもりが甚だ長くなりました。先に挙げたミツキ

エヴィチの四つの作品のうち、一番短い「ブドリスの三兄弟」を訳してみました。（おそらく本邦初訳であろうと思われませう。表現のニュアンスについて教えて頂いた熊倉ハリナさんにお礼を申し上げます）「リトアニアのバラード」という副題を持つこの作品がショパンのバラード四番と関係がありそうかどうか、考えてみてはいかががでしょうか。

ショパンとの関連を別としても、往時のリトアニアが近隣のポーランド、ロシア、ドイツ（チュートン騎士団）をどう見ていたかがうかがえて面白い作品だと思えます。なお、「氷のごとく」大金を持つというのは、たくさんのお金があるということを表す比喩で、今でも使われている言い方だそうです。

「三人目はスキルギェウに従い、ニエーメン河を越えて行け！
かの地で目にするは、みすぼらしき家の物の具なれど

すぐれたサーベルや楯を選ぶがよい
そして、かの地より嫁を連れてくるがよい

次頁へ続く

「そう申すは、世界中どこの異人よりも愛らしいのがポーランド娘だから
小猫のごと陽気で

顔は乳より白く、まぶたには黒きまつげ
輝く両の目は、二つの小さき星のごと

「かの地より我は半世紀前、若かりし頃

ポーランド娘をめぐりしが

それも今は墓の中。だが、我は今でも妻を思い出す
こちらの方角を眺めやるたび」

かくなる訓話を我は与え、道中に神の加護を願いき

かくて彼らは馬に乗り、武器を取り、駆け出しぬ――

やがて秋が来て、冬になつても、息子たちの姿はなし

ブドリスは思いぬ、みな戦（いくさ）で果てたかと

吹雪の中を村へ駆け急ぐ鎧（よろい）姿の勇士あり

マントの下に、何やら大きなものをかくしながら

「おお、その器にあるはノブゴロドの金品なりや？」

――「いいえ、父君、これなるはポーランド人の嫁にございます！」

吹雪の中を村へ駆け急ぐ鎧姿の勇士あり

マントの下に、何やら大きなものをかくしながら

「さてはドイツより帰りしか。息子よ、

そなたは器いっぱいの琥珀を持ち帰ったのであろう？」

――「いいえ、父君、これなるはポーランド人の嫁にございます！」

吹雪の中を村へ駆ける三番目の勇士あり

マントにあふるるは、かの地でかちえたもの

しかれども、それを彼が見せるより早く、老ブドリスはすでに命じき

三番目の婚礼に客人を呼びあつめよと

ウツジの吉田さんを迎えて

去る八月二一日、ポーランドのウ
ツジ在住の吉田勝一さんが来札しま
した。

吉田さんはウツジのポーランド日
本協会の会員で、北海道ポーランド
文化協会が交流する上でなくてはな
らない方です。吉田さんが送ってく
れたポーランドの書籍類や、子供た
ちが描いた絵、手作りの人形などが
ポーランドウィークや料理教室など
で展示されたのを覚えていらつしや
る方も多いでしょう。

去年の秋、ポ文協の訪問団がポー
ランドを訪れた時には、完璧な通訳
はもとより、観光案内、細かな国内
事情、各種の連絡など、十二人のメ
ンバーの雑多な要求にいやな顔ひと
つせずにごやかに応じてくれました。
その吉田さんには是非会いたいとい
う会員の有志がその夜十数人集まり
札幌駅の近くの居酒屋で懇親会を開
きました。

吉田さんは現在、クラコフのヤギ
ェウオ大学の日本学科の専任講師で
国際交流基金の援助で日本学科の五
年生を引率して、七月から八月にか
けての一月程、岡山でホームステ
イをしながら日本語の研修をしてき

たそうです。この研修が終わって、
学生たちをポーランドに送ったあと
一人で札幌を訪れたというわけです。
去年の旅行の思い出話に花が咲いた
のはいうまでもありません。

この時のおしゃべりの中から二つ
の楽しい希望が出されました。
一つは、もう一度、出来れば毎年
でもいい、ポーランド訪問旅行を実
現させたいということ。ポーランド
側では、訪問の日程が早くわかれば
それに合わせて「日本週間」を開催
したい、とのことでした。

もう一つは、ヤギェウオ大学の日
本学科の学生を、他の地域ではなく
北海道に招待して、道内各地でホー
ムステイをしながら日本語の勉強を
するのに協力したい、ということだ
した。会員の皆さん、いかがですか。
吉田さんには今後とも、北海道と
ポーランドとの交流のかけはしにな
っていただきたいものです。

小林 暁子

「ポーレ」編集委員会

斎田道子・清水保子

吉田 宏

〔連絡先〕621-1738（斎田）